pāramitā（波羅蜜）の語源・語義について

阿　　理　生

［1］ pāramitā は，諸種のいわゆる『般若経（*Prajnāpāramitā*）』群における最も重要な術語の一つであり，『般若経』理解の根幹に関わる．その語義については諸説があるが，文献学的に必ずしも充分な吟味を経ないまま今日に至っている[1]．本稿では，従来の諸説を再検討し，別の新たな視点から『般若経』に即して pāramitā の語義の真相解明を試みたいと思う．

［2］現在までの pāramitā に関する語源・語義の説は概ね次の三種に大別される．

(1) pāram + i（< √ i）+ tā ［彼岸・究極に行くこと，～に到ること］

(2a) pāram + ita（pp. < √ i）+ tā ；(2b) pāram + ita（pp. < √ i）> f.

［彼岸に到っていること・状態］

(3a) pāramī（f. < parama）+ tā ；(3b) pārami（< parama + in）+ tā

［最高たること，完成の状態，完全性］

(1) は，Haribhadra の *Abhisamayālaṃkārālokā* に見られる，文法学を援用した語源解釈[2] である．(2a) は，Böhtlingk und Roth : *Sanskrit Wörterbuch* の説である．M. Monier-Williams : *A Sanskrit-English Dictionary* は疑問符付きで採用している．白石眞道氏，干潟龍祥博士は独自の理由で採用する[3]．(2b) は，-ita という過去分詞形がそのまま女性名詞化したとする説で E. Burnouf の著[4] に見られる．なお (2a) と (2b) は共に -ita を pp. < √ i とみなすもので，古くは Candrakīrti の *Madhyamakāvatāra* の記述中[5] に認められる．(3a) は，R. Childers : *Dictionary of the Pali Language*，T.W. Rhys Davids and W. Stede : *Pāli-English Dictionary*，F. Edgerton : *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary* や E. Conze [6] 等の説である．その場合，Pāli の pārami ; pāramī と pāramitā（Pāli と Skt. は同形）とは同義語とみなされている．(3b) は，水野弘元博士の論文註記[7] に見られる．

pāramitā の漢訳「度」や「到彼岸」，Tib.訳 pha rol (tu) phyin pa については，上記語源説の中 (1) と (2) のいずれに基づいた訳語とみなすか意見が分かれる[8] にしても，大多数の研究者はそれらの訳語を通俗語源解釈に基づくとみなし，(3)

の説こそ Skt. 文法にかなった本来の意味だと見る．しかし果たしてそうであろうか．『般若経』本文の趣旨にかなっているのであろうか．以下，現存『般若経』類の中，最古形を示す *Aṣṭasāhasrikā P°*（『八千頌般若』[*AP*]）並びに漢訳『道行般若経』の文脈に即した検証を要する．

[3] pāramitā は 大乗（mahāyāna）と関連するので，まず大乗を明かす箇所を見てみよう．

(a)「……『世尊よ．このように菩薩大士は，大甲冑を着けていて大乗で出立し大乗に乗り込んでいる．その大乗とはどれ（katama）ですか．どんなふうにしてそれは出立していると知られるべきですか．どこからその大乗は出ていくのですか，どこを通ってその大乗は出立しているのですか．どこにその大乗はとまるのですか．だれがこの大乗によって出ていくのですか．』 このように問われて，世尊はスブーティ尊者にこのことを言われた．『スブーティよ．大乗とはこれは量られない（大きさの乗り物）の別名である．スブーティよ．量られないものとは量るものさしがない（apramāṇa）[9] からである．スブーティよ．次のように汝は問うた．〈どんなふうにしてそれは出立していると知られるべきか．どこからその大乗は出ていくのか．どこを通ってその大乗は出立しているのか．どこにその大乗はとまるのか．だれがこの大乗によって出ていくのか．〉と．諸のパーラミター[pl.]とともに出立している．三界に属するものから出ていく．舵（ārambaṇa）が[取られる]そこを通って出立している．一切智の所でとまる．菩薩大士が出ていく．……」　（*AP*, Vaidya ed., p. 11, l. 31- p.12, l. 9；『道行』大正蔵 8, pp. 427c-428a）[10]

ここには，菩薩大士が大乗という巨大な乗り物に乗って，三界に属する所から出発し一切智に到り着くという趣旨がみられる．大乗は出発地から到着地に至るまでの道程を経て行く乗り物であることは明らかである．そして次の叙述が注意される．

(b)「……『世尊よ．このスブーティ尊者は智慧パーラミターに関して求められているのに，大乗を説明すべきだと考えています．』 そこでスブーティ尊者は世尊にこのことを申上げた．『世尊よ．私は智慧パーラミターを過ぎて大乗を語ったのではありません．』世尊は言われた．『スブーティよ．その通り（語ったの）ではない．スブーティよ．大乗を説くことは，智慧パーラミターに随順していることだ[11]．』」

（*AP*, p. 12, ll. 25-28；『道行』p. 428a）

ここでの大乗は実質的に智慧パーラミターであると知られる．引用 (a) の中に，大乗は「諸のパーラミターとともに出立している」とあるから，智慧を含む六つのパーラミターは出発から到着までの全道程に関わっているのであって，決して到着地たる一切智のみに関係するのではない．したがって，pāramitā には，語源

説中の (3) の説の〈最高・完成・完全〉という意味は全く当てはまらない[12]．(2) の説も〈到っている状態〉であれば，(3) の説と同様に該当しない．それでは残る (1) の説が再考されるべきか．それとも全く別の語義分解が可能であろうか．

［4］その点について，『大智度論』における次の記述が有効な手掛りとなろう．

(c)「問曰．云何名檀波羅蜜満．答曰．檀義如上説．波羅（秦言彼岸）蜜（秦言到）．是名渡布施河得到彼岸．……」　（大正蔵 25, p.145a）

ここに，波羅蜜の語を波羅と蜜とに分け，波羅を彼岸に，蜜を到に当てる．É. Lamotte の仏訳[13] では，その「蜜」を mi と記すが，『大智度論』では pāramitā は例外なく波羅蜜で訳し波羅蜜多としない[14] から，「蜜」は mitā の可能性が大きい．いずれにせよ，この箇所から得られる重要な知見は，pāramitā < 波羅（彼岸 pāra）＋蜜（到 mi [-tā]）という語義分解である[15]．ここから二種の読みが導かれる．（Ⅰ）pāra + mi（< √mā）+ tā，（Ⅱ）pāra + mita（pp. < √mā）> f.『大智度論』自身は（Ⅱ）に依ることが他の箇所から検証されうる（この件については紙幅の都合で別稿に譲る）．しかし pāramitā 本来の語義の探求にはむしろ（Ⅰ）の pāra + mi（< √mā）+ tā が注目される．複合語の後分が動詞語根である場合，弱化した語根の形が用いられる（例 pāra-ga [< √gam]）．pāra-mi の mi も√mā（はかる；横切る，渡る）の弱形[16] に違いない．それによれば，pārami とは pāra + mi で「彼岸に渡る（もの）」を意味する．すでに見た［3］の資料（a）（b）で，大乗と智慧パーラミターとは本質的に相違しないから，yāna としての pārami とは〈彼岸に渡る乗り物としての船〉である．漢訳「波羅蜜」も，海上を行く船，しかも商船をイメージした巧みな音写語のように思われる（波は海上を，羅は絹のうすぎぬ，蜜は蜂蜜［ともに貿易商品］を意味するであろう）[17]．なおそこにおける yāna（乗）が陸上の乗り物でなく，洋上を行く船であることは，［3］の資料（a）の叙述やその中の ārambaṇa の語[18] が船の舵（< [船尾から] 垂れ下がるもの[19] < ā√ramb =√lamb）と推定されることなど[20] から，疑う余地はないであろう．pārami とは実にそのような yāna であった．

［5］それでは pāramitā の -tā は何を意味するのであろうか．それは上記語源説 (1) (2) (3) では抽象名詞の接尾辞とされるが，異なる解釈がすでに古典的に存在していた．世親の *Abhidharmakośa-bhāṣya* には pāramitā に関し簡潔な説明がある．

(d) svasyāḥ sampadaḥ pāragamanāt pāramitāḥ.（Pradhan ed., p. 267, ll. 19f）

この箇所を真諦訳『阿毘達磨倶舎釈論』には，「此六云何名波羅蜜多．由至自圓德際故．復次波羅摩者謂菩薩最上品故．是彼正行，名波羅美（眠履反）[pāra-

mi]．是彼正行聚，名波羅美多［pāramitā(ḥ)］．互不相離故．」（大正 29, p.249c）のように原文にない説明を交えて訳出する．ここに，pārami の「聚（あつまり）」が pāramitā(ḥ)［pl.］だとして，-tā が抽象名詞の接尾辞ではなく，集合名詞の接尾辞（cf. Pāṇini, 4. 2. 43）であることを示唆している．「波羅蜜多」，「波羅美多」として -tā に「多」の字を当てたのも音写に集合的な意味を込めた訳語と評しうる．-tā はこのように集合を表わす接尾辞だとすれば，pāramitā とは，〈彼岸に渡る船（pārami）の集団すなわち船団〉ということになる．とすれば，上引の世親釈原文は次のように試解できよう．「彼岸に行くから，自らのもの［船団］に属する連合（集合）［Nom. pl. f.］が，pāramitāḥ［pl.］（彼岸に渡る船団）である」[21] と．なお -tā が集合を表わす場合，通常は単数［sg.］であるのに，集合内の要素が意識された集合は複数［pl.］表示という区別が注意される．

［6］それではさらに，智慧を含む六つのパーラミターの意味が究明されるべきである．まず智慧パーラミターと五パーラミターとの関係を見てみよう．

(e)「また世尊よ．智慧パーラミター［以下 p° と略称］（の後）について行きつつ，智慧 p°（のなす通りに）あらしめ（＝習い）つつある菩薩大士は色・形に執われるべきでありません．受・想・行・識に執われるべきでありません．それはなぜか．もし色・形に執われるならば，色・形の発生について行くのであって智慧 p° について行くのではありません．……それはなぜか．発生について行く者は智慧 p° を受け容れることなく，智慧 p° との［船団としての］結合（yoga）に入ることもなく，智慧 p° に向かって［隊形を］整えそろえる（paripūrayate）こともないからです．（彼は）……一切智に進み出ることはないでしょう．」（*AP*, p.4, l. 25 -p.5, l. 1；『道行』p. 426a）

(f)「このようにまたシャーリプトラ尊者よ．菩薩大士は智慧 p° について行きつつ一切智に近くなる．」（*AP*, p.6, ll. 13f；『道行』p. 426c）

資料（a）（b）（e）（f）からすれば，智慧 p°（大乗）は他の五 p° と共に船団を組み，その先頭を行き，五 p° は智慧 p° の後を，注意をそらすことなく智慧 p° の操船に習ってついて行くという関係が見てとれる．智慧に主導される布施・持戒・忍辱・精進・禅定の構図が，洋上を航行して目的地に向かう大船団の編成と相重なっている．pāramitā（彼岸に渡る船団）は，布施等の六つにとってまさしく比喩（暗喩）となっていることが知られよう．

比喩としての pāramitā（彼岸に渡る船団）を後分とする dāna-p° ないし prajñā-p° は，Karmadhāraya 複合語であり，「彼岸に渡る船団のような布施」ないし「彼岸に渡る船団のような智慧」と訳出されうる．ただし，その正確な理解のためには，複合語前分の upameya（喩えられるもの）とその後分（upamāna）とに共通な特

性（sāmānyo dharmaḥ）についての適確な把握が必要である．以下の資料はその考察の手掛りとなろう．

(g)「……世尊は言われた．『それゆえアーナンダよ．それ（A）によって一切智に向けられた諸善根が〈pāramitā（彼岸に渡る船団）〉という命名を得るところのそれ（A）は，最も上であることから，〈prajñā-pāramitā [22]（彼岸に渡る船団のような智慧）〉という命名を得る．それゆえその場合アーナンダよ．一切智に諸善根が向けられることから，智慧 p° は五 p°［pl.］の先頭を行く（水先）案内人であり周回往復の案内人である．この［智慧 p° との］結合によって五 p° は智慧 p° のもとにこそ入っている（antargata）．アーナンダよ．六 p° のそろった（paripūrṇa）異名，これがすなわち prajñā-pāramitā といわれる．それゆえその場合アーナンダよ．智慧 p° が称讃されたときにはすべての六 p°［pl.］が称讃されている．例えば，アーナンダよ．大地にまかれた種子にして用意万端を得つつあるものが生長する．そして大地はそれら種子の基盤である．そしてそれら種子は大地に支えられて生長する．まさしくこのように智慧 p° のもとに集められた五 p° は一切智に［方向が］定まる．五 p° は智慧 p° に支えられて生長する．そして智慧 p° に護られていることから，pāramitā という命名を得る．それゆえその場合アーナンダよ．智慧 p° こそ五 p° の先頭を行く（水先）案内人であり周回往復の案内人である．」

（*AP*, p. 40, l. 26 - p. 41, l. 4；『道行』p. 434b）[23]

prajñā-p° の前分後分に共通な特性とは，資料（g）前半部から知られるように，布施等の諸善根における智慧と船団における水先案内船（船団長の乗組む母船・司令船）とに共通な先見的主導性である．prajñā-p° はそれゆえ〈彼岸に渡る船団における水先案内船のような智慧〉という内容の比喩であり，他方 dāna-p° 等は〈彼岸に渡る船団に属して導かれるもののような布施等〉という内容の比喩だと解される[24]．布施等は智慧の主導を離れては一切智に方向が定まらないから，あくまでも船団に所属する船に喩えられるのである．智慧も布施等の諸善根も共に pāramitā（船団）を後分とする複合語を形成している事実は，船団という集合全体との関わりが重視されていることを如実に示している．

なお，prajñā-p° には，別にもう一つの意味のあることが，資料（g）の中に知られる．prajñā-p° が六 p° のそろった（paripūrṇa）[25] 異名とされるもので，それは六船から編成された船団名に他ならない．それは〈智慧に属する［Gen.］船団〉あるいは〈智慧のもとにおける［Loc.］船団〉という Tatpuruṣa とみなされる．（パーリ資料中の pārami，pāramī など関連諸問題については別に論じたい．）

---

1)　M. Saigusa（三枝充悳），*Studien zum Mahāprajñāpāramitā (upadeśa) śāstra* (1969), Teil

II, § 2, pp.60-132. は，pāramitā に関する詳細な資料論である（平川・梶山・高崎編『講座　大乗仏教 1 —大乗仏教とは何か』昭和 56（1981），pp.129-152 は和文によるその抄録再説である）．ただし『般若経』本文に即した pāramitā の語義解明ではない．最近ようやく『般若経』の記述に即した研究が始まった．渡辺章悟「般若波羅蜜多（prajñā-pāramitā）の解釈」『東洋学論叢』東洋大学文学部紀要第 50 集，印度哲学科篇 XXII，平成 9（1997）；同「prajñāpāramitā の四つの語源解釈」印仏研 46-2，平 10（1998）．

2) U. Wogihara（荻原雲来）ed.（Repr. 1973），p.23, ll. 2-6. ここの訳出としては，本稿註（1）の三枝論文（和文）pp.143-144 に引用の大地原豊教授の訳が明解である．なお『荻原雲来文集』昭 13（1938），p.312 には pāramit + tā による解説を施す．

3) 白石眞道「般若心経略梵本の研究」日佛年報第 12 年，昭 15（1940），p.34 註（19）には「……prajñā-pāramita + tā（女性，抽象名詞）> prajñā-pāramitā（ta ヲ略スルハ Haplologie ニ依ル．例．muditā「喜」< mudita + tā……」（『白石真道仏教学論文集』（1988）に再録，p.495. 同様の説明は他に pp.510-511［密教研究 70（昭 14）上説の初出］，540, 545, 551 に見える）；R. Hikata, *Suvikrāntavikrāmi-Paripṛcchā Prajñāpāramitā-Sūtra*（1958, Repr. 1983），p. XI には，Haribhadra の説明を容認しうるとした上で，しかし菩提・仏たることを得ると決定している者にとってふさわしい菩薩行としての pāramitā の意義を考慮するとき，pāram-ita-tā を採用したいとの旨を述べる．この他，宇井伯壽『佛教思想研究』昭 15（1940），p.378.

4) E. Burnouf, *Introduction a l' histoire du Buddhism indien*（1876), p.413 には，buddhi のような隠れた名辞を修飾するその女性形が名詞化したものという．

5) *Madhyamakāvatāra*［Tib. ］，éd. par Louis de la Vallée Poussin, Bibliotheca Buddhika, IX（1907-1912），p.30 : pha rol tu son pa ni pha rol tu phyin paḥo shes bya ste.「彼岸に行き着いた状態（pāra［ṃ］-gata）がすなわち pāramitā といわれる．」この記述の直後に，業格［Acc. ］を省略しない文法規定に言及しているから，pāram を pāra の Acc. と見ていることが知られ，pāram + ita（pp. < √ i）と解していることだけは少くとも確かである．

6) E. Conze : *Materials for A Dictionary of The Prajñāpāramitā Literature*, 1973. この他『八千頌般若』等の同英訳参照．

7) 宮本正尊編『大乗佛教の成立史的研究』昭 29（1954），p, 272 註（13）．ただしこの水野博士の依った典拠は不明である（pāra-gāmin からの誤った類推か）．その註記で博士はそれが「波羅蜜の本来の意味」となすが，博士著の『パーリ語辞典』二訂版（1970）や増補改訂版（2005）でも pāramī を < parama + in としないで < parama となす．

8) その漢訳・Tib. 訳を（1）の説に基づくとみるのは，本稿註（1）の三枝論文等であり，（2b）の説に基づくとみて説明するのは例えば，南條文雄『梵文金剛經講義』明治 42（1909），p. 15；『岩波仏教辞典』（1989 初版）．なお中村元『佛教語大辞典』の「波羅蜜」の項で「度」や「到彼岸」という漢訳は「ともに完了形」と述べつつも，「到彼岸」の項では「彼岸にいたる，の意」と記して一貫性がない．本稿註（1）の渡辺論文にも（1）の説と（2）の説との区別がない．

9) 『道行』の訳「無有正」p. 427c-428a について，辛嶋静志「漢訳仏典の言語研究—『道行般若経』と異訳及び梵本との比較研究—（2）」創価大学・国際仏教学高等研究所年

報 5 (2002), pp.8-9 では,「無有正」の「正」は「止」と同義で,「限界, きわみ, はて」の意味と推定される. と言う. しかしこれは早計であろう.「正」は pramāṇa (規準となる正しい尺度) の訳とみなしうるからである.

10) Cf. E. Conze : *Aṣṭasāhasrikā Prajnāpāramitā,* Bibliotheca Indica No. 284 (1958), p. 9 ; 梶原雄一訳『大乗仏典 2　八千頌般若経 I』昭 55 (1980) 新訂版, p. 36. いずれも内容理解が不充分なままに訳されている.

11) 前註 (10) の梶山訳註 p. 320 (37) で Skt. 原文の訂正をなすが, 原文のままがよい.

12) この (3) の説には文法的困難もある. dāna-pāramitā の dāna が Gen. とすれば, Gen. と形容詞最上級 (parama < para) やそれに由来する語形との複合語は文法的に成立しない (cf. 辻文法 p. 230, 2. a.) からである. なお (3) の説支持者の中で,「完成」の訳に「完成すること」(実は (1) の説) を含めて二重の意味をもたせる向きもあるが, 形容詞由来と見なす pāramī に動詞的意味はない.

13) É. Lamotte : *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse*, Tome II , p. 701, l. 5.

14) 大正蔵索引第 13 巻に依る. ただし索引 p. 147 に「般若波羅蜜多 - 二種」の句を『大智度論』の三箇所に認めているが, 索引の誤植であり,「般若波羅蜜有 - 二種」と訂正を要する.　15) Lamotte はこの箇所以下の所 (大正 p.190a = 仏訳 p.1058, l. 13 ; 大正 p.191a = 仏訳 p. 1066, ll. 8f) で前の語義分解を忘却または無視して (pāram ita) の分解法を書き添えている. なお本稿註 (1) の三枝論文 (独文) p.74, l. 26 にて, かの『大智度論』p.145a の「蜜」に (m) itā を当てるのは pāram + ita からの先入観による誤りである.

16) その弱形は√ mā > pp. mita から類推可能である. 過去分詞の語幹形成に際し語根は一般に弱化するからである.　17) なお『大智度論』では「波羅蜜」を船とみなした形跡はないようである. なお到彼岸を渡河とみなす場合 (cf. 本稿 [4] 資料 (c)) と到・・大海彼岸となす場合 (大正 25, p. 191) とがある.

18) 従来 ārambaṇa は「対象」と解された. cf. 梶山訳本 p. 319 (35).

19) 今から数千年前から中世まで舵は船尾付近の両舷側面から水中に垂れ下がる形をとる. 例えば, George F. Bass (ed.) : *A History of Seafaring based on Underwater Archaeology* , 1972. 等の各図版参照. なお *Divyāvadāna* や *Gaṇḍavyūha* 等に karṇa-dhāra (舵取人) の用例がある. 舵を karṇa (耳) と言うのは垂れた形状が似るからであろう.

20) yāna の『道行』における音写語「衍」も水の流れ行く意であるから, 陸行ではなく水行がイメージされている.　21) この句の pāramitā を訳者の真諦や玄奘がどう理解したかはまた別の問題であろう.　22) Skt. Vaidya 刊本では prajñā pāramitā- と分離しているが, Tib., 北京版, mi48b8 に従い複合語とみな す.

23) この節と類似の表現は *AP*, p.87, ll. 1-10. にも見える.　24) dāna-p° ないし prajñā-p° の直訳「彼岸に渡る船団のような布施」ないし「〜船団のような智慧」は, そうした比喩内容からすれば,「〜船団をなすような布施」ないし「〜船団をなすような智慧」と意訳した方が一般読者には, より理解しやすいであろう.　25) この語は資料 (e) の paripūrayate と関連する. paripūrṇa とは船団の隊形が整いそろっている状態と言えよう.

〈キーワード〉 pāramitā, 波羅蜜, 到彼岸,『般若経』

(九州大学大学院非常勤講師)

180. The Etymological Meaning of 'pāramitā'

Rishō HOTORI

There have been three main etymological explanations of the important term 'pāramitā' in the *Prajñāpāramitā* literature among scholars, ancient and modern.

(1) pāram +i (< √i) + tā [to go to the further shore]

(2a) pāram + ita (pp. < √i) + tā ; (2b) pāram + ita (pp. < √i) > f. [gone to, arrived at, reached the further shore]

(3a) pāramī (f. < parama) + tā ; (3b) pārami (< parama + in) + tā [highest state, perfection, completeness]

But such all meanings are not suitable for the *Prajñāpāramitā*'s context. According to the *Aṣṭasāhasrikā PP*, 'prajñā-pāramitā' is 'mahāyāna' which is a huge vessel leaving here for the goal. Therefore pāramitā indicates having the process to go through, and is not concerned with the goal only. The above meanings of 'pāramitā', (2) and (3), seem without any application to the real 'pāramitā' in that context.

In the *Mahāprajñāpāramitāśāstra* (大智度論) there is the etymology, 波羅 (pāra) + 蜜 (mi[-tā]). This is probably [pāra + mi (< √mā , to measure; to pass over) + tā]. [pāra + mi] is a vessel (ship) for passing over to the further shore. And according to Paramārtha's (真諦) translation of the *Abhidharmakośabhāṣya*, [-tā] of 'pāramitā' seems a collective suffix [Pāṇini, 4・2・43], not an abstract suffix.

Then 'pāramitā' must be a fleet of vessels passing over to the further shore, and in the context of the six pāramitās (dāna- p°.etc.) 'pāramitā' is a metaphor for the six from 'dāna' to 'prajñā'.

181. The Synonyms of *Ātman* in Early Abhidharma Buddhism

Shigeru SAITŌ

This paper aims to clarify some particulars of early Abhidharma Buddhism based on a consideration of the synonyms of *ātman*. Vasubandhu